

パンダのしっぽは白か黒か : 中国帰国・渡日児童たちの展示場からみる「中国人」, 「日本人」, 「多みんぞく」

著者	城田 愛
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	55-81
発行年	2006-12-28
URL	http://doi.org/10.15021/00001538

パンダのしっぽは白か黒か

中国帰国・渡日児童たちの展示場からみる「中国人」、「日本人」、「多みんぞく」

城田 愛

1 はじめに

国立民族学博物館（以下、民博）は、1974年に創設され、1977年11月に開館した。当時の梅棹忠夫館長は、「われわれがひたってきた日常的な文化とは、まったく異質のものが世界には存在する。それを見て、ぎょっとする」ための「仕掛け」が民族学博物館であるとする（梅棹 1978:67）。そして、梅棹は、中根千枝東京大学・民博併任教授（1978年当時）との対談において、以下のように続けている（梅棹 1978:67-68）。

それ〔民族学博物館の仕掛け〕によって、われわれ人間にたいする理解は、いやおうなしに拡大せざるをえない。そういうことがあるからこそ、日本国家はこれだけ巨大な投資をする決心をしたのだとおもいます。日常生活といえば、日本人の日常生活そのものが現在変化しつつある。日本の人口の10所帯に一所帯の割合で、海外となにか関連がある。自分の親類が海外駐在員になっている、海外と貿易をやっている、留学にいらっているとか、じつに複雑な関係がある。そういう時代になってきた。いやおうなしに、世界のことに関心をもたなければならんようになってきた。われわれの従来の生活のふつうの文脈ではとうていわからないことがいっぱいできてきた。そのくらい文化は多様なものである。博物館は、その世界の多様さのプレゼンテーションの場であるということですね。

この梅棹・中根対談には、当時の民族学と民族学博物館の使命、そして当時の「日本人の日常生活」における「海外との関連・関係」が具体的に述べられていて興味深い。

民博創設から、ちょうど30年目にあたる2004年、特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」（以下、「多みんぞく展」）が、3月25日から6月15日まで開催された。時代が変わり、日本の状況も大きく変化し、民博の展示内容も変容してきた。現在の松園万亀雄館長は、本展示の「あいさつ」において、次のように述べている（松園 2004:3）。

日本の多民族化に注目し、増加する外国人住民、そして変わりつつある日本社会をとりあげます。外国人コミュニティの形成の背景、外国人のくらしについておなじ目のたかさから知るとは、共生の第一歩であり、現代社会のうごきにも積極的に取り組もうとする現在の民族学にとっても、重要な課題のひとつです。

庄司博史展示プロジェクトリーダーが述べているように、「多みんぞく展」における「基本理念、方法論、用語・概念」は、「おそらく日本ではじめての在日外国人展示の実現可能性にかかわると同時に、外国人を対象とする展示の意義をも問う問題」であった（庄司 2004：9）。さらに、庄司が続けていうように、本展示の特徴は、「展示の対象となるコミュニティをふくめ、館外の人びとが企画から資料の収集、展示にまで深くかわったという点ではおそらく[民博において]唯一のものであろう」（庄司 2004：14）という点にある。

しかし、1995年にリニューアルした大阪人権博物館では、常設展示に「被差別部落と身分」に加え、「民族の列島の南北」において、「在日コリアン」、「沖縄」、「アイヌ民族」のコーナーなどを既に設けている。ここでは、「人権からみた日本社会」を統一テーマに設定し、「部落差別をはじめとした日本社会の歴史と文化に根ざした差別問題をいくつかのテーマに分けて構成」している（大阪人権博物館 2003：1）¹⁾。人権の視点から、「被差別部落」、「在日コリアン」、「沖縄」、「アイヌ民族」などをひとつの展示場で構成するには、「民族」と文化の表象をめぐる民族誌展示に関しても、多くの課題や難題をかかえているといえる。

たとえば、吉田憲司（1998：531）は、「どの民族をとりあげても、その内部はけっして均質ではない。地域・世代・職業・性別、さまざまな要素のからみあいのなかで、ひとつの民族のなかにも多様な文化と多様な文化観が存在する。そのどれをとって『自文化』の表象とするのか。そして、それを選びだすのは誰なのか」と問い、次のように注意をうながしている（吉田 1998：531）。

個々の民族の手による「自文化」の展示の動きは、今後も加速されるであろうし、また加速させなければならない。ただ、民族誌展示をめぐる繰り返し問われてきた「展示をする権利は誰にあるのか」という問いへの答えにみえるこうした動きも、じつのところ、必ずしもその最終的な解決策とはなりえない点には留意しておくべきであろう。

それでも、大阪人権博物館は、日本の国公立の博物館などではこれまで取りあげてこなかったテーマに挑み、それぞれのコーナーの担当学芸員や協力者が、それぞれの対象コミュニティの出身であることが多いという点においても、当博物館の試みは画期的といえる²⁾。

民博における「多みんぞく展」や大阪人権博物館の活動は、世界各地におけるミュージアムのあらたな動きとも連動している。クリフォード(Clifford 1997 [2002]：240)は、このあたらしい博物館の展開を「オルタナティブ・ミュージアム」とよび、「歴史的遺産や文化的伝統、さまざまな歴史を解釈し、管理するなどの接触の活動についての新たな要求を生んでいる」と述べる。そして、「[先住民族の]部族のミュージアムやマイノリティの文化センターは、従来からのミュージアムの実践に重なりあうと同時に、そこ

から逸脱するような方法でコミュニティの生産物を収集し展示している」と続けている (Clifford 1997 [2002]: 240)。

先住民にくわえ、奴隷として連れてこられ、あるいは労働者として移住してきた人びととその子孫たちが暮らすアメリカ合衆国 (以下、アメリカ) の博物館施設において、最大規模をほこるのはスミソニアン・インスティテュートである。1846年に設立されたスミソニアンでさえも、先住アメリカ人やアフリカ系アメリカ人に関する展示やプログラムを博物館で取り扱うようになり、当事者が展示に携わるようになったのは、1960年代の公民権運動をへた1970年代以降になってからである (Ruffins 1992: 583)。

1992年にロサンゼルスのリトル・トーキョーの一角に創設された全米日系人博物館 (Japanese American National Museum, 以下 JANM) も、公民権運動に影響をうけている。JANMの活動目的は、つぎのように明記されている。「全米日系人博物館は、日系アメリカ人の歴史と体験を、アメリカ史の大事な一部として人びとに伝えていくことによって、アメリカの人種と文化の多様性に対する理解と感謝の気持ちを高めることを活動の目的としています」 (<http://www.janm.org/jpn/general/mission.html>)。ここでは、多文化社会アメリカにおける、「アメリカ人」である日系の人びとが取りあげられているのである。

JANMのように、展示対象を日系の「アメリカ人」として設定すると、日本から渡米した人びとやアメリカ生まれの二世、三世たちが、どのようにアメリカ市民となり (またはアメリカ市民になることを拒まれ)、どのような生活をアメリカに築きあげていったのかという、大まかなストーリーを描きやすいといえる。

ところが、本稿でとりあげる「在日中国帰国者」 (以下、帰国者) やその二世、三世たちの場合、「日系中国人」および「中国系日本人」というアイデンティフィケーションがみうけられるのである (蘭 2000: 414)。つまり、日本から中国へ移住し、そして日本へ帰国または渡日してきた人びと、およびその配偶者や二世、三世をふくむ渡日家族たちの生活の場と帰属意識は、中国と日本の双方にまたがっているのである。そのため、中国と日本を「単純に」二分化するような国籍、「民族」、「血」といった近代国民国家が造り出した概念や、欧米におけるナショナリティやエスニシティの議論をそのまま援用し、帰国者たちの状況を論じることは難しいといえる。

したがって、「多みんぞく展」のなかでも、「在日中国帰国者」および、わたしが担当した「パンダ教室—いろいろなみんぞくのこどもがまなぶところ」のコーナーは、展示をとおして「みんぞく」を描くことがよりいっそう難しく、同時に「民族」という概念を生活者の視点から問い直す可能性をおびていたといえる。

最近 (2005年) のテレビ・コマーシャル (梅酒の宣伝) で、パンダにむかって「白と黒、どっちの割合が多いの?」と問うものがあつた。また、「パンダ教室」の展示場におかれた「パンダ・ノート」には、来場者から「パンダのしっぽは、白か黒か?」と

いう問いがいくつか寄せられていた。この問いを目にするまでは、パンダのしっぽの色のことなど、まったく意識したことはなかった。

しかし、このパンダのしっぽを、人びとのアイデンティティに、そして白と黒を、帰国・渡日者の「中国色」と「日本色」に置き換えてみるとどうなるだろうか。このたとえは、少々、強引である。だが、この白と黒のレトリックは、実は、「民族のマジック」を暴いてくれる「パンダ・マジック」へと導いてくれるのである。

それでは、以下、「パンダ教室」の展示制作のプロセスにそって、パンダのしっぽの色を探しもとめる旅へ、つまり、民族誌展示における「みんぞく」の表象をめぐる問題を考えていく。

2 「多みんぞくニホン」展示へむけて

2.1 在日中国帰国・渡日者たちとの出あい

「中国人?」。この問いを受けたのは、「多みんぞく展」のために取材調査で訪れていた京都の小学校であった。この質問をわたしにむけた小学校1年生の女の子は、「中国帰国残留婦人・孤児」とよばれる祖父母や両親などをもつ、「中国帰国者（渡日）児童」（以下、帰国・渡日児童）とされる。

大阪の公立小学校で帰国・渡日児童を支援するための授業を担当する女性教員が、「先生が児童から『何歳?』と何度も聞かれるのと同じ回数ぐらい、中国からの帰国・渡日児童たちは、日本のほかの小学生に『なにじん?』と言われている気がする」と話してくれたことがある。京都に暮らすこの女の子が、初めてあうわたしに、初めて口にした言葉が、「中国人?」だったのは、この教員が話すような日本の小学校で進行中の「多みんぞく」的状況を象徴的にあらわしているといえる。

しかし、なぜ、この女の子はわたしに「日本人?」とは聞かなかったのだろうか。しかも、この問いには、「自分と同じ中国人でしょう?」という女の子の期待が込められているように感じられた。

調査する側・展示する側であるわたしは、この問いに驚き、嬉しく感じつつも、正直、戸惑いを覚えた。そして、「うちのおじいちゃんは、沖繩っていう南のほうにある島の出身やねんけど、そのおじいちゃんのおじいちゃんのもっともとおじいちゃんは中国の福建というところからその島に渡ってきたんよ。だから、ちょっぴり中国人かも」と応えた³⁾。この小学1年生は、「中国人」、「日本人」、「なにじん」という言葉がもつさまざまな意味やその重みを既に体得しているようにみえたが、さらに「沖繩人」、「多みんぞく」というカテゴリーにまでは、まだ想像がおよばないようであった。

この女の子とは正反対の反応にも遭遇した。大阪の小学校で、帰国・渡日児童と卒業生、家族たちもつどう春節の行事に参加していた児童の祖母で帰国者である女性に、展

示の趣旨を説明し、展示への協力を依頼すると、「わたしは外国人ではありません。日本人です！」と中国語で断られてしまった。この祖母の複雑な表情は、展示の制作時から、展示の終了した今でも忘れることはできないでいる。

この祖母に中国語で質問したのは、「多みんぞく展」の「在日中国系」のコーナー中に含まれた「中国帰国者」の一角を担当した、「帰国者三世」である南誠氏（京都大学大学院生）である。南は、本展示の解説書において、「『中国帰国者』のあいまいさ」は、「日本人でもなければ、中国人ともいえない、逆説的にいえば、日本人でありながら、中国人でもある」と述べている（南 2004：91）。だからこそ、既述の帰国・渡日児童や、その祖母の世代である帰国者とのあいだでも、「中国人」と「日本人」にまつわる発話が生まれたのである。

南は、解説文を次のように、しめくくっている（南 2004：91）。

そのような異質性、特殊性をもつ帰国者の存在がみえてこそ、はじめて僕ら帰国者と日本に暮らすさまざまな人たちが共生できる「多みんぞくニホン」としての環境が整うようになるといえよう。

この「異質性、特殊性」を、どのように子どもでもわかるように展示をとおして提示できるのだろうか。また、近年の日本の学校や社会における多文化教育や多文化共生への取りくみにたいする批判、つまり、衣服・衣装、祭りや芸能、食べ物ばかりを取りあげる傾向にある「3F (fashion, festival, food)」から、「3L (language/literacy, law, life)」(在日外国人たちの言語・識字問題、法・制度の確立や充実、生活の保証・改善)へもっと関心をうつすべきだという声をどこまで意識しながら展示を創りだすことができるのだろうか。さらに、本展示では、南のようにコーナー担当者自身が当事者である場合も多いなか、当事者ではないわたしが、この展示や対象となる人びとにどこまで近く、深く関与することができるのだろうか。これらの問いを抱えながら、展示制作に取りくむことになった。

しかし、これらの不安は、実際の「パンダ教室」を初めて訪れた際に一番に目に飛び込んできた、教室の標札である愛らしいパンダの笑顔によって、一瞬にして吹き飛んでしまった。この手作りの看板の表側には「きょうはパンダあります」、裏側には「きょうはパンダありません」と書かれている（写真1, 2）。いったい、どのような子どもたちが、この看板を目印にあつまり、活動をしているのか興味がわいてきた。多文化教育・多文化共生に関する理念、理論、論理の問題よりも、まずは現場へ向かおうと思ったのである⁴⁾。



写真1 岸二小「パンダ教室」の看板(表)

写真2 岸二小「パンダ教室」の看板(裏)

2.2 「パンダ教室」とは

パンダの看板が出迎えてくれる、実存する「パンダ教室」の廊下側の窓や壁には中国語で書かれた文字や児童が描いたパンダの絵が並び、なかからは元気な大阪弁と中国語が聞こえてくる。ここは、大阪府吹田市立岸部第二小学校（以下、岸二小）の「パンダ教室」の入口である（写真3）。教室には、児童が作成した中国の地図や、鳳や駒、面や衣装などがあり、ロッカーの上には獅子や龍が所せましと置いてある。

岸二小の校区には府営集合住宅があり、帰国者とその家族たちが集住している。帰国者の子や孫たちは、さまざまな家庭環境や生いたちをもって、日本の学校へ編・入学しており、言葉や学校生活において数々の問題に直面している場合が多くみられる。とくに、日本に来たばかりの児童は、日本語の指導および教科の補習指導にくわえ、生活面での指導も必要となる。帰国者やその呼び寄せ家族が増加する1980年代以降、パンダ教室のような帰国・渡日児童にたいする取りくみがなされてきている。帰国者の家族が多く住む地域に設置される「中国等帰国孤児子女教育研究協力校」として、近年（1999・2000年度）では、小学校13校、中学校5校、高等学校1校が文部科学省によって指定されている。

岸二小では、1987年以降、帰国・渡日児童を受け入れてきており、その数は1995年の18名を最多に減少し、2003年当時は6名（全校児童数は412名）で、全員、中国の国籍をもち、日本の永住権を取得しているという。「パンダ教室」には、中国や日本、そのほかにルーツをもつ約20名が、毎週1回あつまり、週末にも活動をおこなっている。

本展示のために協力してくれたもう1校の京都府宇治市立平盛小学校（以下、平盛小）は、1981年に初めて帰国・渡日児童を受け入れ、1985年から協力校の指定を受け



写真3 岸二小「パンダ教室」の入口

てきた。校区には、府営集合住宅44棟（約2,080世帯、人口約7,000人、2001年現在）があり、多くの帰国・渡日児童たちもここに住んでいる。2003年10月時点では、全校児童355名のうち、48名が帰国・渡日児童であり、中国にルーツをもつ子どもの数が全体の10%以上を占めている。日本語教室は毎日3教室ひらかれており、週2回、「パンダ教室」という各教科の補習授業も放課後おこなわれている。

最近、日本育ちの帰国・渡日児童の数が増え、中国語が話せないようになってきており、中国語を母語とする両親や祖父母との意思疎通が難しくなっているという。そのため、かつて日本語を指導していた岸二小の「パンダ教室」では、中国語も教えるようになった。中国人講師による中国語指導のほか、中国についての「調べ学習」、中国の料理教室、地域の行事で獅子舞や龍舞の披露などをおこなっている（写真4）。

平盛小の日本語教室に通級する児童たちは、週1回、「生活の時間」で中国について学んでいる。2003年度には、1～4年生は龍の踊りを練習し、5・6年生は中国のルーツについての「調べ学習」をおこなった。授業参観させてもらった日は、在学生や卒業生の「おばあちゃん」で「中国残留婦人・孤児」である2人を招き、子どもたちが「なぜ、中国へいったのですか。どんなものを食べていましたか。なぜ、生別・死別しなくてはいけなかったのですか」などと質問した。帰国・渡日児童やその家族たちには、それぞれの「生活の時間」が流れてきたのだと実感させられた。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真4 吹田市「子どもの人権芸術展」に出演する岸二小「パンダ教室」の児童たち。2003年12月5日撮影

その授業の最後に、教師が「自分たちの身近にいるおじいちゃんやおばあちゃんたちに直接、話しを聞けることは素晴らしいことですよ」とまとめた。この「身近」という言葉には、ここに暮らす中国から帰国・渡日してきた人びとの家族と学校、地域のつながりが感じられた。

「多みんぞくニホン」に暮らすわたしたちは、どのような「身近」な関係を築いていくことができるのだろうか。それでは、以下、あらたな「多みんぞく関係」を創っていくプロセスのひとつの試みとして位置づけられる「パンダ教室」の展示場から、「中国人」、「日本人」、「多みんぞく」について考えていく。

3 「パンダ教室——いろいろな みんぞくの こどもが まなぶ ところ」

3.1 展示「パンダ教室」へようこそ

「多みんぞく展」における「パンダ教室——いろいろな みんぞくの こどもが まなぶ ところ」は、岸二小と平盛小に実在する「パンダ教室」から、そのアイデアとネーミング、そして多くの協力を得た。展示自体は、表1のとおり、実際の「パンダ教室」で現在も使用されている品々や、壁に飾られている児童たちの作品などを借用し、黒板と学習机と椅子、ロッカーなどを配置し、その教室の部分的再現・模倣を試みた（写真5）。コーナーは、一辺が約4mの五角形のスペースを利用した。「パンダ教室」に関する映像も場内のテレビ・モニターで紹介し、実際の「パンダ教室」での活動が伝わってくる賑やかな声、言葉、音楽が展示場の「パンダ教室」にも響きわたった⁵⁾。

また、コーナーの壁の一面には、「多みんぞく学校マップ」（写真6, 7, 8）をはじめ、

表1 「多みんぞく展」における「パンダ教室」の展示リスト

番号	品目	資料ラベル	サイズ (cm)	枚数(組数)(000)	取集者	取集場所	集	備考
1	表紙「パンダあります」	看板パンダ(併二小)	36 (455組合) × 21	1	2月7日	城田愛	借用	
2	生地のついた中国地図	中国幅国児童がいた地図(併二小)	80×110	1	2月7日	城田愛	借用	
3	中国語ルビのついた自分の名前「楊剛」と「柳方茂子」	中国幅国児童の名前(併二小)	14×38	2	2月7日	城田愛	借用	
4	中国語ルビのついた絵(パンダ)	中国幅国児童が書いた絵(併二小)	27×37	1	2月7日	城田愛	借用	
5	生地の書いた絵(ワニの長城)	中国幅国児童が書いた絵(併二小)	36×39	1	2月7日	城田愛	借用	
6	教室に飾られている飾り(「福」の文字)	教室の飾り(併二小)	65×20	1	2月7日	城田愛	借用	
7	教室に飾られている飾り(パンダの絵が描かれた額縁)	教室の飾り(併二小)	20×20	1	2月7日	城田愛	借用	
8	切り絵色紙(5年鈴江仁)	中国幅国児童がつくった切り絵(併二小)	30×24	1	2月7日	城田愛	借用	
9	切り絵色紙(6年井上俊宣)	パンダ教室の児童がつくった切り絵(併二小)	30×24	1	2月7日	城田愛	借用	
10	切り絵色紙(6年井上俊宣)	パンダ教室の児童がつくった切り絵(併二小)	30×24	1	2月7日	城田愛	借用	
11	ワニの紙芝居「万の山にほんご」	教材(併二小)	26×19	3	2月7日	城田愛	借用	
12	毛毡球(毛毡)で「文字、チェンチョウ、チェンズ」	中国のあそび道具「ジェンズ、チェンズ」	15×3	4	2月7日	城田愛	借用	
13	面(男児)	教室の飾り(併二小)	25×30	1	2月7日	城田愛	借用	
14	面(女児)	中国劇でつかう男児の面(併二小)	28×30	1	2月7日	城田愛	借用	
15	面(熊)	中国劇でつかう女児の面(併二小)	28×30	1	2月7日	城田愛	借用	
16	面(熊)	中国劇でつかう女児の面(併二小)	28×30	1	2月7日	城田愛	借用	
17	チャイナ服(ピンク色×白)	中国劇でつかう男児の服(併二小)	60×105(袖広げ)	1	2月7日	城田愛	借用	
18	チャイナ服(ピンク色×白)	中国劇でつかう男児の服(併二小)	66×45	1	2月7日	城田愛	借用	
19	チャイナ服(青色×赤)	中国劇でつかう女児の服(併二小)	60×105(袖広げ)	1	2月7日	城田愛	借用	
20	チャイナ服(青色×赤)	中国劇でつかう女児の服(併二小)	66×48	1	2月7日	城田愛	借用	
21	チャイナ帽子(三編み付き)	中国劇でつかう男児の帽子(併二小)	13×18	1	2月7日	城田愛	借用	
22	獅子舞のかぶりもの	中国劇でつかう男児の帽子(併二小)	60×50(頭部)	1	2月7日	城田愛	借用	
23	「日本語教室」の生徒作品の木彫看板	中国劇でつかう男児の帽子(併二小)	18×25×2	1	2月10日	城田愛	借用	
24	壁新聞「もっと知りたい中国の料理」	壁新聞(平盛小)	80×110	1	2月10日	城田愛	借用	
25	壁新聞「日本語教室について」	壁新聞(平盛小)	80×110	1	2月10日	城田愛	借用	
26	紙人形(パンダ)	中国劇「王様と九人の兄弟」で使われるペーパーサート(平盛小)	70×47	5	2月10日	城田愛	借用	
27	ラミネート紙看板「パンダ教室」	日本語教室の表紙(平盛小)	A4サイズ	1	2月10日	城田愛	借用	
28	児童の書いた絵(かわしまもと)	日本語教室の表紙(併二小)	A4サイズ	1	2月10日	城田愛	借用	
29	ラントセル(赤)	中国幅国児童の書いた絵(併二小)	無し	3	2月10日	城田愛	借用	
30	マウチャゴリ	中国幅国児童の書いた絵(併二小)	無し	2	2月10日	城田愛	借用	
31	中国語で書かれた紙札	中国語で書かれた紙札	縦長	2	2月10日	城田愛	借用	
32	中国の飾り	中国語で書かれた紙札	無し	2	2月10日	城田愛	借用	
33	男女の飾り	中国語で書かれた紙札	無し	2	2月10日	城田愛	借用	
34	中国語で書かれた紙札	中国語で書かれた紙札	無し	2	2月10日	城田愛	借用	
35	パンダグッズ、中国グッズ、絵本、雑誌、マップネット等	パンダグッズ、中国グッズ、絵本、雑誌、マップネット等	20×10	複数	2月10日	城田愛	購入	
36	アジアのおもちゃ、パンダダイ社製出品「アイパロ」等	アジアのおもちゃ、パンダダイ社製出品「アイパロ」等	5	30	2月10日	城田愛	購入	
37	中国製の飾り、紙札、磁器の風、アラスチック製のランタン等	中国製の飾り、紙札、磁器の風、アラスチック製のランタン等	130cm用	2	2月10日	城田愛	購入	
38	毛毡球(「毛毡」で「文字、チェンチョウ、チェンズ」)	毛毡球(「毛毡」で「文字、チェンチョウ、チェンズ」)	130cm用	2	2月10日	城田愛	購入	
39	チャイナ服(女児用)	チャイナ服(女児用)	130cm用	2	2月10日	城田愛	購入	
40	チャイナ服(女児用)	チャイナ服(女児用)	130cm用	2	2月10日	城田愛	購入	
41	チャイナ服(女児用)	チャイナ服(女児用)	130cm用	2	2月10日	城田愛	購入	
42	チャイナ服(女児用)	チャイナ服(女児用)	130cm用	2	2月10日	城田愛	購入	
43	チャイナ帽子(男児用)	チャイナ帽子(男児用)	無し	3	2月10日	城田愛	購入	
44	ハンガー	ハンガー	無し	1	2月10日	城田愛	購入	
45	面(男児)	面(男児)	無し	1	2月10日	城田愛	購入	
46	面(女児)	面(女児)	無し	1	2月10日	城田愛	購入	
47	面(熊)	面(熊)	無し	1	2月10日	城田愛	購入	
48	パンダのぬいぐるみ	パンダのぬいぐるみ	無し	複数	2月10日	城田愛	購入	
49	生糸「パンダのぬいぐるみ」	生糸「パンダのぬいぐるみ」	無し	複数	2月10日	城田愛	購入	
50	柳子席(高校生用サイズ)	柳子席(高校生用サイズ)	無し	6	2月10日	城田愛	購入	
51	椅子用のフックション	椅子用のフックション	無し	6	2月10日	城田愛	購入	
52	黒板(緑色の旧式)	黒板(緑色の旧式)	無し	1	2月10日	城田愛	購入	
53	ホワイトボード	ホワイトボード	無し	1	2月10日	城田愛	購入	
54	衣袋ロッカー	衣袋ロッカー	無し	複数	2月10日	城田愛	購入	
55	衣袋ロッカー	衣袋ロッカー	A3とA4サイズ	複数	2月10日	城田愛	購入	
56	感知シート	感知シート	18×25	複数	2月10日	城田愛	購入	
57	色紙筆(12色)	色紙筆(12色)	無し	複数	2月10日	城田愛	購入	
58	整理棚	整理棚	W89×D29×H89	3	2月10日	城田愛	購入	



写真5 民博「多みんぞく展」における「パンダ教室」のコーナー



写真6 「多みんぞく学校マップ」

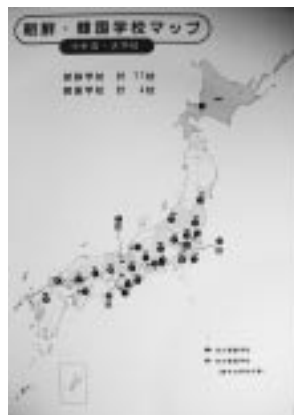


写真7 「朝鮮・韓国学校マップ」



写真8 「公立・自主の夜間中学校マップ」

表2のとおり、コリアン系、中国系、フィリピン系、ベトナム系、イスラーム系、南米系、沖縄のアメリジャンなどの子どもたちや、在日コリアンの一世たちがかよう中学校夜間学級などにおけるさまざまな活動を伝える写真、児童・生徒たちの絵画や作文、使われている教科書などを展示した（写真9）。

このコーナーの主な目的は、二つあった。第一に、日本の各地に点在する「多みんぞく」の学校や教育の現場における活動の一端を、来場者、とくに子どもたちにも分かりやすく伝えること。第二に、来場者たちが、「多みんぞく」の遊びを体験したり、韓国

表2 「多みんぞく展」における「パンダ教室」の「多みんぞく教育」コーナーの展示リスト

小区分	小テマ	番号	品目	展示ラベル	サイズ (cm)	収集者	収集状況	収集先	
みんぞく学校	韓国学校	1	作文「渡日史」	韓国学校生徒の作文 (大阪市 白頭学院建国中学校)	B4 サイズ	藤井幸之助	借用	白頭学院 建国幼・小・中・高等学校	
		2	週番表 亀	週番表 (大阪府堺市 堺朝鮮初級学校)	縦26×横34	藤井幸之助	借用	堺朝鮮初級学校	
	朝鮮学校	3	週番表 花	朝鮮学校児童の絵「学芸会」(東大阪朝鮮初級学校)	縦27	藤井幸之助	借用		
		4	絵 学芸会	朝鮮学校児童の絵「花見」(大阪市 生野朝鮮初級学校)	縦38.5×横54	藤井幸之助	借用	東大阪朝鮮初級学校	
		5	絵 花見	朝鮮学校児童の絵「楽しい授業」(大阪市 生野朝鮮初級学校)	縦47×横68.5	藤井幸之助	借用	生野朝鮮初級学校	
	中華学校	6	絵 楽しい授業	朝鮮学校児童の絵「楽しい授業」(大阪市 生野朝鮮初級学校)	縦38.5×横56	藤井幸之助	借用		
		7	写真	大阪中華学校の春劇祭	A4 サイズ	城田愛	新規撮影	大阪中華学校	
		8	チャイナ服上着	廻りの衣装と太鼓・ばち (大阪中華学校)	55×46	小谷幸子	借用		
		9	チャイナ服ズボン		80×50	小谷幸子	借用		
		10	太鼓		直径11×19	小谷幸子	借用		
		11	ばち		40×2	小谷幸子	借用		
		12	絵日記(紫色の表紙)	大阪中華学校児童の絵日記「遠足」	40×28	小谷幸子	借用		
	ブラジル学校	13	絵 (オレシジ紙付き)	大阪中華学校児童の絵	縦70×横90	小谷幸子	借用		
		14	写真	ブラジル人学校 Escola Do Grupo Opcao (茨城) 【撮影：掛札綾氏】	A4 サイズ	庄司博史	借用	掛札綾氏	
多みんぞく学校	フィリピン学校	15	写真	フィリピン系のごともがやよう 「国際子ども学校 (ELCC; Ecumenical Learning Center for Children)」 名古屋市内にある日本聖公会中部教区によって運営されている。幼稚園から中学生 までの約20名が在籍し、フィリピン文部省のカリキュラムにそって、フィリピン 語、英語、一部、日本語でまなんでいる。	A4 サイズ	高畑幸	借用		
		16	写真	アメリカン・スクール・イン・オキナワ 【撮影・提供：田嶋正雄氏】 1998年、民間の教育施設として沖縄に開校し、現在、65名の小・中学生が日本語と 英語で学んでいる。「アメリカン」とは、「アメリカ人とアジア人の両親をもつ子、 またはそうした祖先をもつ人」。在日米軍基地の75%がある沖縄県には、約4,000人 のアメリカンがいる。	A4 サイズ	城田愛	借用	沖縄タイムス社編集局 社会部田嶋正雄氏	
	宗教(イスラム)学校	17	写真	イスラーム学校でまなぶごともたち (神戸モスクにて)	A4 サイズ	河田尚子	借用		
		18(1)	写真	民族学級のこどもたちの演劇【主催と写真提供：大阪市外国人教育研究協議会】	A4 サイズ	城田愛	借用	大阪市外国人教育研究協議会	
	みんぞく学級	18(2)	写真	民族学級の授業【提供：大阪市立長橋小学校民族学級】	A4 サイズ	小谷幸子	借用	大阪市立長橋小学校民族学級	
		19	写真	スペイン語の母語教室のクリスマス会 (神戸) 【提供：ワールドキッズコミュニティ】	A4 サイズ	庄司博史	借用	ワールドキッズコミュニティ	
	夜間中学校	20	写真	ベトナム語の母語教室 (大阪府八尾市)	A4 サイズ	庄司博史	新規撮影		
		21	写真	中学校間学級の「外国語」の授業で朝鮮語をまなぶコリアンの一世 (東大阪市立 太平寺中学校)	A4 サイズ	金美善	新規撮影		
	教科書	様々な学校	22	チャマナゴリ 教科書 (コリアン、ブラジ ル、中華学校、中国 韓国・渡日児童用等)	【無し】		藤井幸之助	借用	藤井氏の娘さん
			23	念冊子、文集、記 念冊子、多文化共生 関連文獻	【無し】		藤井幸之助 他	借用	藤井幸之助、リアン、 ハタン、陳天鳳、岸二小
学校関連	様々な学校	24	念冊子、文集、記 念冊子、多文化共生 関連文獻	【無し】		藤井幸之助	借用	藤井幸之助	



写真9 「多みんぞく学校・教室」のコーナー

語の体験学習に参加したり、「パンダ・ノート」⁶⁾に自由に書き込んだり、塗り絵を楽しむ場を提供することであった(写真10)。このコーナーは1階の出口付近にあったため、歩き疲れた家族連れや、遠足や課外学習、レポート作成のために来ていた小学生から大学生までが、休憩する場としても人気があった(写真11)。

コーナーの入口には、岸二小の「パンダ教室」や平盛小で使われている手作りの看板をかかげ、教室の雰囲気が出るようにした。解説・写真パネルは、子どもの目線にあわせ、ほかのコーナーよりも低い位置に貼りつけ、解説文や資料ラベルなどには、なるべく平易な日本語をもちいた。以下、主要パネルの解説文を引用する(解説文中のルビや読みがなは、省略する)：

【タイトル】

パンダきょうしつ：いろいろな みんぞくの こどもが まなぶ ところ

【解説文】

「パンダきょうしつ」へようこそ！ここでは、どんなおともだちが、べんきょうをしているのでしょうか？

おもに、中国そして、さいきんでは日本でうまれそだち、中国語がはなせたり、中国につながりをもつこどもたちが、まなんでいます。このこどもたちは、「中国帰国児童」とよばれています。中国帰国児童たちは、さまざまな、おいたちをもって、日本の学校へ入学したり、編入しています。日本のことばや、学校でのせいかつなどのもんだいをかかえていることもあります。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真10 「パンダ・ノート」に夢中になる岸二小「パンダ教室」の児童たち

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真11 民博を訪れる岸二小「パンダ教室」のみなさん。2004年5月18日撮影

このように、日本の学校で、中国からきたこどもたちが日本語をまなんだり、中国についてベンキョウするところが、パンダキョウしつです。卒業生のなかには、しょうらい、日本語と中国語をいかし、日本と中国とのはしわたしをするような、しごとをめざしているひともいます。

このコーナーでは、みて、つくって、からだをうごかして、中国やほかのくにに、そしてみんぞくのあそびなどを、いっしょに、たいけんしてみましょう。

【ミニ解説文】

このコーナーにあるのは、みんなくのちかくの吹田市立岸部第二小学校（岸二小）と京都の宇治市立平盛小学校（平盛小）の「パンダ教室」や「日本語教室」でつかわれているものです。パンダ教室のほかにも、中国帰国児童たちがまなぶ教室が、日本の各地にあります。

3.2 展示制作という舞台

展示は、岸二小と平盛小から借用した実物（標本）資料を中心に構成した。しかし、実際にこれらの小学校で日々、使われているものを大量に借用することは無理である。借用資料の合計数は、岸二小からは23件、平盛小からは5件となった。実物資料の数が限られていたため、獅子舞のかぶりものや中国劇でもちいる面ののように、できるだけ現物とそれらが実際に使われている様子がわかる写真や映像を併用し、視聴覚的にわかりやすい「パフォーマンスな展示」⁷⁾にするように心がけた。

その結果、「パンダ・ノート」(No.14)には、ビデオに登場する獅子舞の場面の絵が描かれていたり、「ビデオ（ししまい）も良かったです（2人の息がぴったり合っていました）」(No.2)や、小学校低学年の女児のコメントで「おどりとってもうまかったですね」(No.34)という声が来場者から寄せられた（写真12, 13）。

この獅子舞のかぶりものが創られた経緯もユニークである。資料ラベルには、「岸二小パンダ教室で使われている獅子。大阪府豊中市立第四中学校夜間部の日本語教室へかよう帰国者たちが美術の時間に作ったもの【5月26日以降は出演で使うために返却】」と説明をつけた。わたしの展示説明を聞いたか、ラベルを読んだ中学生が、「手作りのししまいはすごかった」と「パンダ・ノート」(No.38)に書いている。

帰国者の大人たちが、日本語を習うためにかよう夜間中学校で作成したものを、帰国・渡日児童たちが借り、獅子舞をおどる（写真14）。この獅子舞の魅力は、その動作から、中国と日本にまたがる帰国者たちの生活の動きや、在日の帰国者同士の、そして地域の学校とのつながりが、観る者にも想像できる点にあるといえる。

「パンダ教室」で展示した獅子頭は、日本製ではある。しかし解釈の仕様では、日本のものでも中国のものでもなく、同時に、日本のものでも中国のものでもあり、在日中国帰国者たちによって創られたあらたな文化の動きを象徴しているといえる。このように移住者たちが創出する文化を提示することは、「日本の民族／民俗」、「中国の民族／民俗」といった概念自体を再考させ、民族誌・民俗展示のありかたを模索する契機となりうるだろう。



写真12 「パンダ・ノート」(No.14)より



写真13 「パンダ・ノート」(No.34)より



写真14 岸二小での手作り水餃子が並ぶ春節行事でも活躍する獅子舞。この獅子頭は、大阪府豊中市立第四中学校夜間部の日本語教室へかよう中国帰国者たちによって、美術の時間に作られた。2004年1月28日撮影

「パンダ教室」の展示物をめぐり、さらなる動きが展示場でおこった。獅子頭をはじめ、中国劇で使う衣装や面は、岸二小の「パンダ教室」の児童たちが特展の開催期間中に学校行事において公演するため、休館日に展示場から外して返却しなければならなかった。このことは資料の収集調査の時から知らされていたが、現在、使用中のものをぜひとも展示したかったため、あえてこれらを選定した。返却された資料が、実際に今日もどこかで使われていることを来場者にも想定してもらえよう、資料ラベルには特展期間中に返却することも明記した。

また、通常の民族誌展示は、展示する側が、海外まで出向いて資料を収集してくることが一般的だが、今回の「多みんぞく展」においては、この流れとは逆に、展示される側のほうから博物館の立地する社会まで、それぞれの生活のために移住・移動してきたのである。近年のグローバル化の流れにより、ますます、人類学者の居住する「ホーム・グランド」自体が「フィールド」となり、異国の地における「フィールド・ワーク」だけではなく、調査者の身近な社会におけるフィールド・ワーク、つまり身近におきていることに目を向ける「ホーム・ワーク」の必要性が強調されるようになってきている。本展示も、このように「多民族化」する日本社会における「フィールド／ホーム・ワーク」から立ち上がったものである。

4 コミュニケーションが行き交う展示場

4.1 「パンダ・ノート」に綴られた声

特展の取材当時（2003年3月まで）、岸二小の「パンダ教室」には、帰国・渡日児童が6名在籍していた。展示物の写真、映像、児童の作品を選定する際には、その子どもたちひとりひとりの「顔」や「声」が、なるべくバランス良くあらわれるように、かといって、この子どもたちが帰国・渡日児童であることを強調しすぎるのが無いように心がけた（写真15）。

また、来場者のなかにも、自由に感想などを書き込める「パンダ・ノート」に「ビデオでぎょうざ作ってる男の子、すごい上手だった。美味しかった??」と、個人から個人へのメッセージが寄せられていた（No.39）。

つまり、パンダ＝中国と、エスニシティやナショナルリティの安易な「動植物園化」（コアラ＝オーストラリア、チューリップ＝オランダなど）によって生じる一枚岩的なイメージを来場者に喚起させるのではなく、あくまで個人の顔がみえる展示になるよう試みたのである。なかには、「ニーハオ」と挨拶する「チマチョゴリ姿パンダ」の絵のように、ナショナル・イメージを交差させたものも2点ほどあった（写真16、「パンダ・ノート」No.9より。No.8にも「チマチョゴリ姿パンダ」の絵あり）。

「パンダ・ノート」には、パンダの絵や「パンダ大好き！」といったパンダへの思い



写真15 「ピンク・パンダ・チーム」のパネル



写真16 「パンダ・ノート」(No.9)より

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真17 奈良教育大学教育学部附属中学校のみなさん。2004年5月24日撮影

も多かったが、それ以上のことが書かれたものも多数あった。「いろいろと想い、思い、重い内容も考えながらふりかえりました。阪神シニアカレッジ2年生5班リーダー Y. M.」(No.41)のように、さまざまなメッセージが記されていた。

「パンダ・ノート」に綴られた言葉のなかには、「パンダ教室」と同じ年頃の小学生をはじめ、中学や高校、大学という学校に所属している人びとから寄せられたものが多かった。これには、学校行事の一貫として団体で来館した児童・生徒たちが、自分たちの所属する「学校アイデンティティ」を強く意識し、「パンダ・ノート」に書かれた他校生にたいする自己アピールをおこなっていたともいえる(写真17)。それに加えて、実際の小学校の教室を模した展示空間という仕掛けの影響もあったと思われる。

4.2 「多みんぞく」な人びとの声

この展示場のもつ「学校イメージ」をこえ、さらに展示が対象とする人びとの来歴に共振するような感想も寄せられた。「パンダ教室」の中国帰国・渡日児童のように、中国と日本に、つまり、ひとつ以上の国や文化にルーツをもつ人びとからもメッセージが寄せられていたことが大きな特徴といえる。

たとえば、朝鮮半島と日本にルーツをもつ小学生および中学生、そしてインターナショナル・スクールの高校生から下記のようなメッセージが書かれていた：

ぱんだ教室のみんなへ これからもがんばってください。応援してます♥♥ (ちなみに私は、かんこくと日本のあいだに産まれたハーフです。) ウォジャオソンウェイ 私は、大阪に住んでいる小学生です。学校で外国のことについて教わる講座が開かれたことがあります。そのときに私は、中国のことについて学び発表しました。それで、中国語であいさつができます。へいせい16年5月2日 (No.8, 写真18)

中国っておもしろい。かめんさいこ!! えんそくでここにきた われかんこく人です! 加美北小学校 4.30 [ハングル省略] (No.9)

ニーハオ [漢字で] やっほ↑↑私は今日日本 [「中国」に二重消し線] にいる中国人です♡
そして、朝鮮族なのでハングルもできるので自己紹介 (?) しませう。[ハングル省略] そして、パンダがvery × 2 好きです!! これからもガンバレー (何を?) !! 大教大の附中から。(No.35)

「SENRI INTERNATIONAL SCHOOL SISはたのしいよー多民族だしね (^-^)」 (No.33)

成人の来館者からも、「中国の文化と韓国の文化似とる。うち中国人の血流れてるんよ。韓国人ですが」 (No.42) や、つぎのような言葉が寄せられていた。

インドネシアのこまや、韓国のけんだまなど、形が全く異なりやってみると案外難しかったです。韓国のチマチョゴリ華やかでキレイですね。私の父も韓国籍ですが、日本に来てから産まれたようで韓国籍でありながら韓国語も全く話せず、韓国へ行った事もないようです。私は半分血が混ざっていますが恥じることなく毎日楽しく過ごしています。(No.43)

「パンダ・ノート」を展示場に設置した当初は、このように、「多みんぞく」な人びとからの反響もあるとは予測していなかった。というのも、展示された実物資料の数は限られ、小学生向けの説明文だけで、どれだけ「パンダ教室」の「多みんぞく」な状況を

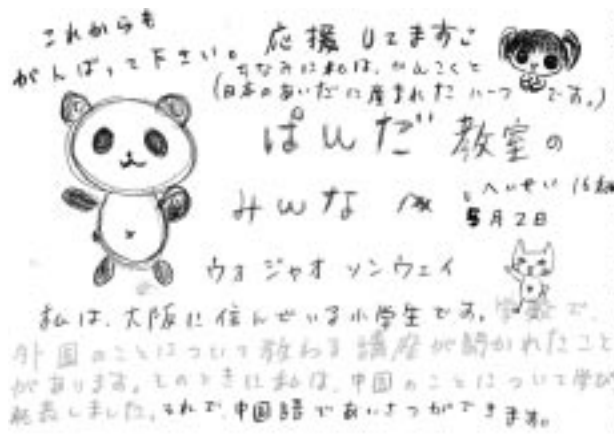


写真18 「パンダ・ノート」(No.8)より

伝えることができるのか、正直、不安であったからである。しかし、少なくとも、この展示をみた上述の「多みんぞく」な人びとは、何かしらの共感をおぼえ、「パンダ教室」の子どもたちへメッセージを寄せてくれたといえる。

つまり、「パンダ教室」は、来場者が日本における「多みんぞく化」する学校の状況を単なる情報として知るだけでなく、「多みんぞく」な人びとがそれぞれの背景を感知し、自己のルーツをかえりみながら、ほかの人びとのルーツも意識するような場を提供していたといえる。ここは、「多みんぞく」、そして「他みんぞく」へも想像がおよぶような機会を創出するパフォーミングな展示場であったといえよう。

4.3 パンダ・マジック—パンダのしっぽは、白か黒か？

さまざまな声が綴られた「パンダ・ノート」であるが、なかでも一番、目をひいたのは、パンダのしっぽの色にまつわるものであった。

「パンダのしっぽは白って知ってた??」(写真19, No.6より)

「パンダのしっぽわ実わしる♡関学生♡」(No.34)

これらの記述を目にするまでは、パンダのしっぽの色など、まったく気にとめていなかった。だが、以後、パンダのしっぽを意識しはじめ、「国立の博物館で、しっぽが黒い『偽物』パンダ・グッズを展示しては問題になるかもしれない」と、実際に展示したものを念のため確認してみた。すると、中国製と思われるパンダのぬいぐるみや、パンダの形をした陶器製の置物には、しっぽが白いものもあれば、黒いものもあり、しっぽそのものが無いものもあった。「パンダ・ノート」に描かれたパンダにも、しっぽが白いもの、黒いもの、しっぽが無いものがみうけられた。



写真19 「パンダ・ノート」(No.6)より

パンダのしっぽの色を問うこと自体は、素朴で単純な問いかけである。しかしながら、冒頭で述べたように、このパンダのしっぽを、人びとのルーツに、そして白と黒を、帰国・渡日者たちの「中国アイデンティティ」と「日本アイデンティティ」に置き換えてみる。そうすると、この白と黒のレトリックは、近代が造出した人びとを分類し、白か黒かに二分化するような「人種」や「民族」のマジックを暴いてくれる「パンダ・マジック」へと想像が繋がっていくのである。

「パンダ教室」のモデルとなった岸二小で使われている『中国を知ろう教材集 岸部第二小学校1999年度』には、「中国人」、「日本人」、そして「何人かわからない」と話す渡日児童の両親の語りが紹介されている。

子どもの頃から自分たちは日本人の子どもだと知っていました。私たちが住んでいたところには、日本人がたくさん住んでいたの、日本人だということではじめられることはありません。でも、今は中国に帰ると「小日本」と言われるし、日本では「中国人」と言われるし、何人かわかりません。半分日本人で、半分は中国人です。中国でお母さんを育ててくれた人が亡くなってから、日本はお母さんの祖国だし、自分たちの子どものことを考えて日本へ行く決心をしました。[中略] わたしは家では中国語で話すようにしています。子どもも少し話すことができますが書くことはできません。中国人でもあるわけですからやっぱり中国語がちゃんとわかるようになってほしいと思っています。

また、岸二小の「パンダ教室」に所属していた渡日児童の作文「ぼくのふるさと」もその教材でとりあげられている。この「ぼく」にとっての「ふるさは中国」であり、「ぼくのおばあちゃんは 日本から中国に行き、戦争のあと、日本に帰れなくなった。ぼくは おばあちゃんを見たことがない。よくわからないけど、ぼくたちは 日本にきた」と、祖母や渡日の経緯について述べている。そして、作文をつぎのようにしめくくっている。

はじめて、日本に来たときは、いやな気持ちだった。でも、だれでも、そうだと思う。先生が中国に行き、楽しいのは、また、日本に帰れるから。ぼくは、ずっと日本にいるから、気分が悪かった。でも、今は なれたから、日本語もわかるし、日本が好きになった。

ぼくは中国語もわかるし、日本語もわかるし、中学に行ったら英語もならう。通訳になれたらいいと思う。野球も好きやし、サッカーも好き。いろいろやりたい。

とりわけ、帰国者二世やこの男児のような三世のアイデンティティは、より複雑となってくる。「『中国残留邦人』である父親の帰国に伴って来日した」という大久保明男氏は、このアイデンティティの揺らぎについて、以下のように見事に描写している（大久保 2000：349）。

この日本への移住と[来日5年後の初めての]中国への帰郷の体験は、わたしに多くの示唆を

与えてくれた。「落葉帰根」という言葉が示すような、アイデンティティの拠り所を本当の帰還すべき地や固定した祖国を探し求めることに求めるのではなく、むしろそれを放棄し、拒絶する「我、大地に帰らず」（与那原 1997：130-137）という挑戦的な宣言に求めるべきだということである。つまり、アイデンティティとは、一つだけの安定した不可変的なものではなく、ディアスポラ的でハイブリティだということでもある。それは、中国人でありながら日本人でもあるというハイブリティ、同時に「完全な」中国人でもなければ「完全な」日本人でもないというディアスポラ、その両方を備え持つ「中国日裔青年」の発見であった。

「中国残留邦人」二世である大久保は、人びとが帰属する固定化されがちな「根」や帰還する地、「中国人」であること、そして「日本人」であることに十分こだわりながらも、中国と日本に分断された「大地」に根を張るのではなく、あらたな動きを展開している。具体的には、「日中混合語」という独特な言葉を駆使し、文芸同人雑誌『北辰』を編みだしている（大久保 2000：346）。

また、特記すべきは、上記の彼の文中にて、「我、大地に帰らず」と帰国者二世の揺らぎを捉えているのは、東京生まれの在日沖縄系二世の与那原恵である。かのじよは、沖縄出身者だけではなく、大久保のような帰国者を含む、移住者たちのルポルタージュをまとめてきている（与那原 1997；1998；2002；2004など）⁸⁾。

つまり、白黒にこだわらない「パンダ・マジック」は、今日の「多みんぞく」、すなわち「みんぞく」と「みんぞく」の出あうあたらしいスタイルの一つといえる。

5 おわりに

さいごに、とっておきの「パンダ・マジック」を紹介したい。

「パンダ教室」の展示以後、目にしたパンダ・グッズを収集する癖がつき、パンダ・コレクションが増えつつある。なかでも、一番のお気に入りのぬいぐるみは、まず、後ろ姿をみると、しっぽが黒いパンダでポイントが高い。前からみると、愛嬌のあるサルがパンダの「着ぐるみ」をかぶっているのである。しかも、「MADE IN CHINA」とくる。

「多みんぞく展」の最初の頃は、しっぽが白ではない（「本物ではない」）パンダ・グッズを展示することさえ躊躇していた。しかし、さまざまな歴史的・社会的な制限があるなか、一色に限定されたカラーや、固定的かつ確固としたオリジンとなる場所の有無にこだわらずに、あらたな生活スタイルを確立しようとしてきた中国からの帰国・渡日の人びとに出あい、移住者によって書かれたものなどを読みすすめていくうちに、ヴァリエーションに富んだパンダ・グッズのほうに目がいくようになった。

このように、オリジナルなものとは違ったもの、変化があるものを求めるのは、沖縄（ウチナー）と日本（ヤマトウ）と移住先の各地を往来してきたわたし自身の揺らぎから、

「みんぞく」の本質主義を強く意識しつつも、「本質対非本質」といった不毛な二項対立におちいることは避けたいという、本質主義へのある種の反動ともいえる。

そして、偶然、この「パンダの着ぐるみを着たサル」のぬいぐるみも見つけたのである。パンダのしっぽの色や、しっぽの有無だけではなく、パンダ以外にさえも自由になれることができってしまう究極の「パンダ・マジック」。この術には、「みんぞく」の本質主義と非本質主義をのりこえていけるようなヒントが秘められているのかもしれない。

この「モンキー・パンダ」の一撃が示してくれているのは、「多みんぞく」をとりあげる展示において必要なのは、従来の民族誌展示のように、それぞれの民族を画一的・一枚岩的にとりあげるのではなく、もっと多様な「みんぞく」のありかたを提示するための想像力と創造力であろう。

現代においては、人びとの移動にともない、複数の地域・国家にまたがり、多言語をあやつる、多彩な「みんぞく」が登場し続けている。それにともない、「みんぞく」の描かれかたや、「みんぞく」の出あうかたちもますます多様化し、「みんぞく」をより柔軟に、多角的にとらえる必要性も生じてきている。

今回の「多みんぞく展」においては、対象コミュニティの当事者や研究者に加え、「在日日本／日系／沖縄系人」である研究者やそれぞれのコミュニティ関係者たちが、「在日中国系」、「在日フィリピン人」、「在日ベトナム人」、「在日ブラジル人」、「在日コリアン」などの展示に携わった。わたしが関与した「パンダ教室」をふくめ、まだまだ「多みんぞく」をどのように展示として提示することができるのか、その課題にとりくむ試行錯誤は始まったばかりである。限られた試みではあったが、今回の展示においては、展示関係者間や対象コミュニティとのあいだに「多みんぞく」の連動、連音（ときには不協和音も）がみうけられた。「パンダ・ノート」にあつまった一部の来館者からの声にも、それらの動きが伝わっていたことがうかがえる。

しかし、民博の常設展示をはじめとする日本に点在する民族誌展示の大多数の、そして、とくに民俗に関する展示の現場では、近年の民族と民俗の文化の多様化する動きに、まだ十分には追いつけてはいないといえる。

今後、今回の展示を機に、日本のなかのさまざまな社会や文化、そして海外に点在する日系・沖縄系移民社会などもとりあげたより多くの民族誌・民俗展示において、「多みんぞく（民族・民俗）」な視点から展示が編み出されることを願っている。

謝 辞

「パンダ教室」の展示制作のための資料調査・収集の際にお世話になりました吹田市立岸部第二小学校、宇治市立平盛小学校の教員、児童、保護者のかたがたに感謝もうしあげます。

注

- 1) 大阪人権博物館は、入稿後の2005年12月、リニューアルをおこない、「差別を受けている人の主張と活動」というコーナーが登場した。これは、「在日コリアン、ウチナンチュ、アイヌ民族、女性、性的少数者、障害者、HIV感染者・AIDS患者、ハンセン病回復者、公害被害者、被差別部落、ホームレス、水俣病患者」の12のテーマから構成されている (<http://www.liberty.or.jp/exhibit/index.html>)。
- 2) 大阪人権博物館の1995年のリニューアルの際、「沖縄」のコーナーを担当した沖縄系二世の仲間恵子氏は、「私にとって沖縄の展示は、何より自分自身の沖縄が問われるテーマであった」と、展示制作の過程において揺れ動いた心情についても記している (仲間 1997: 32)。
- 3) 大阪生れの「在日沖縄系三世」のわたしは、沖縄からヤマトウ、ハワイ、北米、南米へ移り住んだ人たちの移民 (移住) 誌、そして集団舞踊とミュージアムに呈示されるアイデンティティに関する研究に従事してきた (城田 2000; 2001; 2004a; Shirota 2002など)。なお、帰国者や日本の多文化・多民族教育に関するテーマに携わったのは、「多みんぞく展」が初めてであり (城田 2004b)、本稿におけるこれらに関する記述は、まだ試論の段階であることを断っておきたい。
- 4) わたしが「多みんぞく展」に関わるようになったのは、民博の外来研究員となった2003年の7月からであり、その年の3月までは、横浜に新設されたJICA海外移住資料館の研究員として、日系・沖縄系移民に関する展示制作に従事していた。
- 5) 映像は、「パンダ教室の紹介 (吹田市立岸部第二小学校)・『こども人権芸術展』での演舞 (約5分)、「授業風景」(約2分)、「みもとくんのギョウザ教室」(約3分30秒)の3作品を、オート・リピートにしてテレビ・モニターで上映した。ビデオ撮影は、わたしのほか、小谷幸子、南誠、森田真也、庄司博史 (「パンダ・チーム」) の各氏も担当した。Mini DVテープの編集・制作は城田がiMovie (Macintoshのソフトウェア) を使っておこない、民博の映像担当部がDVD化した。これらの映像は、岸二小の「パンダ教室」のみなさんにも気に入ってもらい、「パンダ教室」の紹介などの際に使われるようになった。なお、ビデオ撮影、および展示での使用には「パンダ教室」の許可を得た。
- 6) 「パンダ・ノート」とは、縦18cm、横25cm、24ページ (裏表で48ページ) の画用紙をバインドした既製品で、特展中、合計44冊 (No. 1は紛失。No. 2～No.45) に色々な絵や感想などが書き込まれた。ノートの表紙には、「パンダ・ノート このコーナーにあるものや、ビデオをみてもらったこと、パンダきょうしつのおともだちへのメッセージ、イラストなどをかいてね」と書いたシールを貼った。
- 7) ニューヨーク大学のパフォーマンス学部の教員であるカーシェンブラット・ギンブレット (Barbara Kirshenblatt-Gimblett) は、パフォーマンスとミュージアムに関する刺激的な論考を展開している (Kirshenblatt-Gimblett 1998; 1999; 2000など)。かのじょによれば、シアターとミュージアムは、立体的な空間において織り成される物語であるという点においては同じであるが、決定的な違いがある。それは、劇場においては、みる側は動かずに、みせる側が動くが、展示場においては、みる側が展示場を動きながらみる点である。そうして、この来場者みずからが展示場を歩くという実体験こそが、ミュージアム体験を規定するという (Kirshenblatt-Gimblett 2000: 6)。

このような体験型の「ミュージアム・シアター」においては、情報ではなく「体験」が重要なものになってくるのである (Kirshenblatt-Gimblett 2000: 5)。つまり、情報を伝達するだけの「インフォミング」から、みせる側・みる側においてさまざまなコミュニケーションが生

- じるような「パフォーマンス」なミュージオロジーを提唱している (Kirshenblatt-Gimblett 2000: 10)。そして、ミュージアム体験に演劇論的なアプローチをもちいながら、情報と実体験、知るから感知へ、そして物と物語との関連性を再考している (Kirshenblatt-Gimblett 2000: 1)。
- 8) このような動きに似たものとして、在日の中国系と沖縄系の人びとたちのリエゾン (連音) にくわえ、在日コリアン系の人びとも、自分たちだけの「根 (ルーツ)」以外の土地から土地へ移住してきた人びとの生活に関心を抱くようになってきている。その一例としては、『ごく普通の在日韓国人』(1990 [2000]) の著者で知られる姜信子は、近年では、朝鮮半島だけではなく、日本列島、琉球弧や台湾に連なる島じまを移住してきた人びとの暮らしやその往来から編み出されてきたさまざまな「うた」についても取りあげている (姜 2003など)。

文 献

蘭 信三

2000 「終章 中国帰国者研究の可能性と課題」蘭信三編『「中国帰国者」の生活世界』大津：行路社, 389-421頁。

梅棹忠夫編

1978 『民博誕生一館長対談』東京：中央公論社。

大久保明男

2000 「アイデンティティ・クライシスを越えて—『中国日裔青年』というアイデンティティをもとめて」蘭信三編『「中国帰国者」の生活世界』大津：行路社, 325-351頁。

大阪人権博物館編

2003 『大阪人権博物館展示総合図録—人権からみた日本社会 改訂新版』大阪：大阪人権博物館。

岸部第二小学校

[年不明]『中国を知ろう教材集 岸部第二小学校1999年度』(教材用のプリント冊子)。

姜 信子

1990[2000]『ごく普通の在日韓国人』東京：朝日新聞社。

2003 『ノレ・ノスタルギーヤ』東京：岩波書店。

庄司博史

2004 「いずれ、おとずれる共生社会のために—多民族化の息吹をつたえる」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし』大阪：千里文化財団, 6-14頁。

城田 愛

2000 「踊り繋がる人びと—ハワイにおけるオキナワン・エイサーの舞台から」福井勝義編『講座人間と環境第8巻近所づきあいの風景—つながりを再考する』京都：昭和堂, 58-89頁。

2001 「越境する沖縄女性たちの生活誌—戦後の沖縄, ハワイ, 米軍基地における踊りの舞台から」『移民研究年報』7: 145-161。

2004a 「ハワイの日系・沖縄系移民社会の歩みと動き—博物館にみる生活文化の過去, 現在, 未来」後藤明, 松原好次, 塩谷享編『ハワイ研究への招待—フィールドワークから見える新しいハワイ像』兵庫：関西学院大学出版会, 137-154頁。

2004b 「パンダ教室—中国帰国児童たちの学ぶ場」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし』大阪：千里文化財団, 90-91頁。

仲間恵子

- 1997 『『民族と列島の南北』のなかの『沖縄』—大阪人権博物館の常設展示』『インパクション』103: 32-34。

松園万亀雄

- 2004 「ごあいさつ」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪:千里文化財団, 3頁。

南 誠

- 2004 『『中国帰国者』のあいまいさ』庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪:千里文化財団, 89-91頁。

吉田憲司

- 1998 「民族誌展示の現在: 表象の詩学と政治学」『民族学研究』62 (4): 518-536。

与那原恵

- 1997 「我, 大地に還らず—中国残留孤児二世, 来日後の12年」『Ronza』4: 130-137 (1998 『街を泳ぐ, 海を歩く—カルカッタ・沖縄・イスタンブール』東京: 講談社に再録)。
1998 『街を泳ぐ, 海を歩く—カルカッタ・沖縄・イスタンブール』東京: 講談社。
2002 『美麗島まで』東京: 文芸春秋社。
2004 『サウス・トゥ・サウス』東京: 晶文社。

Clifford, James

- 1997[2002] *Routes: Travels and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge, Massachusetts & London, England: Harvard University Press (毛利嘉孝・有元健・柴山麻紀・島村奈生子・福住廉・遠藤水城訳『ルーツ—21世紀後期の旅と翻訳』東京: 月曜社)。

Kirshenblatt-Gimblett, Barbara

- 1998 *Destination Culture: Tourism, Museums, and Heritage*. Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
1999 Performance Studies [Rockefeller Foundation, Culture and Creativity, September 1999]. (Internet, 26th August, 2005, <http://www.nyu.edu/tisch/performance/pages/essays/bkg.html>).
2000 The Museum as Catalyst (Internet, 26th August, 2005, <http://www.nyu.edu/classes/bkg/web/vadstena.pdf>).

Ruffins, Fath Davis

- 1992 Mythos, Memory, and History: African American Presentation Efforts, 1820-1990. In Ivan Karp, Christine Mullen Kreamer and Steven D. Lavine (eds.) *Museums and Communities: The Politics of Public Culture*. Washington and London: Smithsonian Institution Press, pp. 506-611.

Shirota, Chika

- 2002 *Eisaa: Identities and Dances of Okinawan Diasporic Experiences*. In Ronald Y. Nakasone (ed.) *Okinawan Diaspora*. Hawai'i: University of Hawai'i Press, pp. 120-129.

〈インターネット〉(文献リストに含まれていないもの)

<http://www.janm.org/jpn/general/mission.html>

(全米日系人博物館 「全米日系人博物館の活動目的」, 最新アクセス日2006年11月20日)

<http://www.liberty.or.jp/exhibit/index.html>

(大阪人権博物館リパティおおさか 「総合展示一覧」, 最新アクセス日2006年11月20日)